

## ルクレティウスにおける ἡδονή

藤谷 道夫

「ヘドネー（快・喜び）が、祝福された生の<sup>テロス</sup>始め（機動因）であり、<sup>ルクレ</sup>終わり（目的）である」と、エピクロスは述べているが、エピクロス哲学の根幹をなす考えはヘドネーであり、また、それが最高善（*summum bonum*）でもある。エピクロス哲学の最も基本的な概念であるこのヘドネーが、ルクレティウスにおいてどのように翻訳、表現されているかを考察してみたい。

従来、エピクロスの哲学が、ルクレティウスにどのような影響を与えたかという比較研究は十分に進められてきたが、個々の概念の言語学的、文学的な考察はほとんどなされてこなかった。本論文は、ルクレティウスのエピクロス哲学の受容を言語学的な側面から考察し、その新しい概念の導入法や語りの全体的な特徴を捉えようとするものである。

本題に入る前に、ルクレティウスの語りの基本的な特徴を指摘しておこう。何よりもまず、詩人はエピクロス哲学の重要ないくつかの基本的な概念をギリシャ語からラテン語に移し変える時、難解で特殊な翻訳語を作り出したりはせずに、常に当時の既製の言葉、用語を用いているということが挙げられる。実際、*ἄτομος*（元素）や *εἶδωλον*（映像）、また、*ἀταραξία*（平安）といったエピクロス哲学の基本概念でさえ、様々なラテン語に置き換え、ひとつの統一した専門語として用いたことは一度もない。これは単に、韻律の要請のみに由来するものではなく、詩人独自の語りの特徴にも端を発している。即ち、人々にとっての甘いムーサの蜜としての役割から、詩人は常に既製の概念から導入し、次第に比喻とアナロジーによって、ギリシャ語本来の意味へと接近させていくという手法を取っているからである。

エピクロス哲学において、肉体的にも精神的にもあらゆる苦から解放された（*ἀπονία*）心の状態——エピクロス哲学の目指す最高の理想——はアタクシアと呼ばれるが、エピクロスは、さらに、魂がすべての悩みから解放され、肉体がいかなる苦しみからも解放された状態を静的な喜び

(ἡδονὴ κατασθηματικῆ) と名付け、運動によって引き起こされる魂および肉体の喜びを動的な喜び(ἡδονὴ κίνητικῆ) と名付け<sup>2)</sup>、ヘドネーを静と動の二つに分けて区別している。一方、ルクレティウスの作品においては、この二つを明確に定義した箇所はない。というのも、『De rerum natura』自体が自然学を中心に扱ったものだけに、エピクロス倫理学の体系的な説明に主眼が置かれているわけではないからである。このため、主に倫理的な叙述は各六巻の序歌においてなされることになる。しかし、明確な定義はないにせよ、詩人はヘドネーを一般的な意味以外に、静的なヘドネーと動的なヘドネーを意識的に区別して用いており、詩的な叙述や形容の中に潜ませている。言わば、哲学を文学的な地平、次元に還元し、暗示の中に哲学の主張を溶け込ませているのである。

以上のことを踏まえた上で、具体的に動的なヘドネーが詩の中でどのように表されているかを見てみよう。

ἡδονὴ に値するラテン語は、**voluptas** であるが、動的な意味で用いられる例を分類してみると次のようになる。

- (1) 感覚上の喜び (II. 966, 968. / IV. 627, 629. [味覚])
- (2) 性の喜び (IV. 1057, 1114, 1201, 1208, 1263.)
- (3) ウエヌス (I. 1 / II. 172)

この結果から分かることは、voluptas がヘドネーの訳語であるにもかかわらず、非常に使用頻度が少ないということである。詩人は、ヘドネーの意味を様々な単語で言い換えており、とりわけウエヌスをヘドネーの訳語として多用している。但し、意味の範囲としてウエヌスは(1)の意味で用いられることはなく、以下に見るように、常に性と生殖力の観念と結び付いている。

- (2) 性の喜び (II. 173, 437 / III. 776 / IV. 1052, 1058, 1059, 1071, 1073, 1084, 1101, 1107, 1113, 1128, 1148, 1157, 1172, 1185, 1205, 1215, 1278 / V. 848, 897, 962.)
- (3) 生殖力・生命付与力・生命維持<sup>3)</sup> (I. 2, 4, 7, 8, 13, 16, 21, 22~23, 228 / II. 173 / IV. 1223 / V. 737)

ウエヌスの概念の中には、性の喜びから発して、さらにヘドネーの動的側面として、生きとし生けるものの生殖力、生命維持の本能まで含まれる。動的なヘドネーは単に肉体上の、生理的な喜びだけを指すのではなく、生

きるという運動そのものが動的なヘドネーに根差していることをルクレティウスは詩の中で暗示させている。とりわけ、第一巻序歌の祈願部（第1～23行）にそれがよく表されている。そこでは、動的ヘドネーとしての偉大な生殖衝動であるウエヌスが、世界の生命維持にとって根幹を成していること、そして動的ヘドネーの最上の側面は、世界の生命の存続を確かなものとする点であるという点が暗示されている。例えば、ウエヌスの形容として **alma** が用いられる時、ウエヌスは生命を保持、存続させる動的なヘドネーの象徴となる。‘ウエヌスだけが事物の本性 (rerum naturam) を支配する (gubernans)’ と詩人が歌う時、ウエヌスはまさに生き物にとっての生殖、生命維持、生命全体を意味する動的なヘドネーの全ての側面を表すことになるのである。さらにまた、pabula laeta (豊かな草地) といった何げない表現の中にも、ウエヌスの動的なヘドネーの側面が暗示させられている。形容詞 **laetus** の中にウエヌスの力が感じ取られる表現であるが、この形容詞は他の箇所では性衝動 (IV. 1200) や性の悦び (IV. 1270) を意味し、‘楽しい’ とか ‘うれしい’ という意味を合わせ持つことから<sup>4)</sup>、ヘドネーの意味を直接暗示することにもなるのである。ルクレティウスが ‘豊饒な’、‘肥沃な’ というラテン語 *ferax, fecundus* よりも *laetus* という語を非常に好んで多用するのは<sup>5)</sup>、この形容詞が動的なヘドネーの二つの側面を同時に言い表せることができるからだと言えるだろう。祈願部冒頭箇所はこうしたヘドネー（喜びと生命）に関する語がちりばめられている。‘実りもたらす’ (*frugiferentis*)、‘生命で満たす’ (*concelebras*)、‘胎まれる’ (*concipitur*)、‘生まれ出る’ (*exortum*)、‘甘美な花’ (*suavis flores*)、‘微笑む’ (*rident*)、‘生命育む風’ (*genitabilis aura*)、‘魅力・喜び’ (*lepore*)、‘焦がれて’ (*cupide*)、‘勢い増した川’ (*fluvios rapacis*)、‘若草もゆる野’ (*campo virentis*)、‘甘美な愛’ (*blandum amorem*)、‘生み出す’ (*propagent*)、‘喜ばしきもの’ (*laetum*)、‘愛されうるもの’ (*amabile*) など、ウエヌスの象徴の下で動的なヘドネーの(3)の側面が様々な語によって具体的に置き換えられ、説明されている。次に、祈願部冒頭において注意すべきことは、12～23行目で性の衝動として描写された動的ヘドネーがもっぱら動物に関連しており、人間を対象としていない点である。(ルクレティウスにおいて、名詞 *saecla* は普通、動物の種族を示す。) これは、人間における性本能が愛欲の破滅的な情念の中で破滅してゆくがゆえに、動物の持つ純粋な動的

ヘドネーとは区別されることを意味している。ウェルギリウスが『農耕詩』第三巻の中で、人間と動物の共通の悪として愛の狂気を歌っているのに反し、ルクレティウスは第四巻の愛の記述において、その破滅的な墮落を人間界に限定している。ルクレティウスは動物の持つ原始的な無邪気さゆえに、また自然の好ましい力と通じているがゆえに、動物をとりわけ愛する。しかし、ここで動的ヘドネーが動物で表されるのは、ただ詩人の愛情からというだけでなく、エピクロス哲学において動物が‘自然の鏡’ (specula naturae) であり、動的ヘドネーを純粋な形で映すと考えられていたことにもよると思われる<sup>6)</sup>。実際、ルクレティウスの動物に関する表現を見てみると大抵の場合、喜びに満ちた語によって形容されており<sup>7)</sup>、この点からも人間に対する形容とは対照的である。

このほか動的な喜びを表す名詞として、laetus の名詞形 **laetitia** や **gaudia**、**deliciae** が挙げられる<sup>8)</sup>。

今まで名詞によるヘドネーの等価表現を見てきたが、ルクレティウスは形容詞・副詞によってさらに快の状態を明確にしている。喜びに関する形容詞—suavisとdulcis以外—は、常に動的なヘドネーを意味するか、普通の一般的な喜びを表し、静的なヘドネーを暗示することはない。例えば、**blandus** <心地好い> は動的な喜びに類した意味でしか用いられておらず、生理的、感情的な情緒に訴える喜びに限定される。blanda voluptas は性の喜び (IV. 1085, 1263.) であり、感覚上の喜び (II. 966./V. 178.) である<sup>9)</sup>。また、blandum amorem (I. 19.) は、動物ヘドネー (voluptas) に等しい表現となっている。その他、これに類する形容詞としては、**iucundus** が挙げられる<sup>10)</sup>。一方、これに対して、形容詞 **suavis** と **dulcis** のみが、文脈によって <感覚上の甘美さ> と <精神的な平安状態の甘美さ> とに使い分けされている。

次に静的なヘドネーに目を転じてみよう。前述の suavis, dulcis から見てゆくと、この二つの形容詞だけが、動的な喜びを表す形容詞の中で静的な喜びをも表すことができる。この形容詞の他にない特徴は、純粋に感覚上の快感として用いられるだけであって、他の形容詞のように性愛の感覚に用いられることがないという点である。この二つの形容詞に共通するのは、詩について用いられるという点であり、エピクロスがもたらした真理の言葉の甘美さを暗示する形容詞ともなっている<sup>11)</sup>。とりわけ、それは第

二巻の序歌の冒頭部で明らかにされている。詩人がエピクロスの哲学による心の平安を 'suave' と3度繰り返して歌う時、そしてまた、エピクロスの教えに守られた心の状態よりも甘美 (dulcius) な心境はないと吐露する時、これらの形容詞はまさにエピクロス哲学の理想状態であるアタクシアを意味しているのである。

では、アタクシア自体をルクレティウスはどのように移し変えているのであろうか。アタクシアに匹敵する語として詩人は *pax* (13例作品の中に見いだされるが、そのうち9例までがアタクシアを意味しているものである。) 及び、*voluptas*を採用している。しかし、*pax*, *voluptas* が単独で直接アタクシアを表すことはなく、常に何らかの限定詞に伴われている。具体的にまず *pax* の方から論じていくと、その用例として次のものが挙げられる。*summa cum pace* (I. 45./ II. 647.), *animi pacem* (III. 24.), *pacis eorum* [= *deorum*] (VI. 69.), *tranquilla pace* (I. 31./ II. 1093), *placidam pacem* (I. 40), *placida cum pace* (VI. 69.), *animi tranquilla pace* (VI. 78.) 上に見るように、詩人は他の一般的な *pax* と区別し、アタクシアの概念を限定し得るように配慮を見せている。ルクレティウスのアタクシアの使用法を見てゆく時、我々の気付くことが、二点ある。一つは、作品の中でアタクシアに関する個別の系統だった記述がなされない代わりに、アタクシアの状態の具体的な説明が、常に神々の状態によって代用され、アタクシアが何であるかを説いているということであり、また一つは、天候や海の状態などがアタクシアのメタファーとして機能しているという点である。実際、*pax* の9の用例のうち6例は神々の状態に言及したものであるし、神々の叙述においてエピクロス倫理学の理想状態 (精神と肉体両面での静的喜び) が具体的に明らかにされている。詩人は次のように記している。

omnis enim per se divum natura necessesst  
inmortali aevo summa cum pace fruatur  
semota ab nostris rebus seiunctaque longe  
nam privata dolore omni, privata perclis,  
ipsa suis pollens opibus, nil indiga nostri,  
nec bene promeritis capitur neque tangitur ira.

すべての神々の本性はそれ自身まったき平安の内に、不死なる生命を喜び、人間世界のことから遠くかけ離れ、何の係わりもない。真に神々はあらゆる苦しみからかけ離れ、危険もなく、

(I. 44~48, II. 646~651.)<sup>12)</sup>

自身の力強い能力によって、私達をまったく必要とする  
こともなければ、奉仕によ  
って、心とらえられること  
もなければ、怒りによって、  
心動かされることもない。

nam pro sancta deum tranquilla pectora pace  
quae placidum degunt aevum vitamque serenam,  
(II. 1093~1094.)

静かな平安のうちに、隠や  
かな年月と清らかな生を送  
る神々の聖なる胸にかけて  
誓うが…

……neque ulla  
res animi pacem delibat tempore in ullo.  
(III. 23~24.)

…いかなる時にも、いかな  
るものも(神々の)魂の平  
安を損なうことはない。

……pacia eorum (VI. 69.)  
……placida cum pace quietos (VI. 73.)

神々の平安にとって  
静かなる平安の中に安らぎ  
を享受する…

また、詩人は神々の状態を表す換喩として、**sedes quietae** (III. 18.) と  
いった表現を用いてその平安な状態を表してもいる。次に、アタクシア  
のメタファーとしての役割を演ずる天候等を見てみよう<sup>13)</sup>。神々の世界は  
以下のように描写されている。

quas neque concutiunt venti nec nubila nimbis  
aspergunt neque nix acri conercta pruina  
cana cadens violat semperque innubilus aether  
integit, et large diffuso lumine ridet.  
(III. 19~22.)

その静かな御座を揺るがず  
風もなければ、雨を浴びせ  
る雲もなく、身を凍らす霜  
で固まった雪が白く降りし  
きって、そこを侵すことも  
ない。いつも雲一片もない  
大空が覆い、なみなみと光  
を注いで、微笑んでいる。

また、ウエヌスの到来によって、世界は神々のそれを思わせる相貌を見せる。

te, dea, fugiunt venti, te nubila caeli  
 advetumque tuum, ……  
 (I. 6~7)  
 …… tibi rident aequora ponti  
 placatumque nitet diffuso lumine caelum.  
 (I. 8~9)

女神よ、あなたがお近づき  
 になれば、風は逃げ去り、  
 空の雲は散ってゆく。  
 つややかな海はあなたに微笑  
 しみ、光放って空は晴朗に  
 輝き渡る。

以上の例からも分かるように、魂の静的なヘドネーを表す形容詞はまた同時に天候の晴朗さに用いられ、詩人は天候によってもアタラクシアを暗示させているのである。

ところで、魂の静的なヘドネーを表すこれらの形容詞 **serenus**, **placidus**, **pacatus**, **quietus**, **tranquillus**, **aequus** は、また、*pax* を伴わずにアタラクシアを暗示することができる。

**serenus** : noctes serenas (I. 142.), edita templa serena (II. 8.)

**placidus** : placidum aevum (II. 1094.), placidam vitam (V. 1154.),  
 placido pectore (VI. 75.)

**pacatus** : placidam ac pacatam vitam (V. 1154.), pacata mente  
 (V. 1204.)

**quietus** : sedes quietae (III. 18.), quietos [deos] (V. 168.)

**tranquillus** : in tam tranquillo (IV. 78.) 但し、ここでは名詞として用いられている。aequus は、心の状態を表す時、常に **aequo animo** という形で示され (I. 42 / III. 939, 962. / V. 1119.), 苦しみや煩いのない心の状態 (= serenamente), 即ち、無苦 (*ἀπονία*) の状態を表している。エピクロスによれば肉体的にも精神的にも無苦の状態が、喜びの限度、即ち、喜びの最大の状態ということであるが<sup>14)</sup>、肉体の無苦の状態に関する叙述は、第二巻17行目から39行目にかけて具体的に詳述されている。

次に、*voluptas* であるが、アタラクシアの意味としての用例は3つある。(I. 1 ; III. 40 ; VI. 94) 第三巻でアタラクシアは‘純粹で混じりけのない喜び’ (**voluptatem liquidam puramque**) と歌われているが、この表現はエピクロス自身がアタラクシアを表すのに用いたものである。*ἀκεραίου τὰς ἡδονάς* (sent. 12. § 12.) 詩人はエピクロスの用いる形容詞 *ἀκεραίου* を二つの形容詞 (*liquidam*<sup>15)</sup> *puramque*) で置き換えている。*ἀκέραιος*

は‘混じりけのない’という意味で、苦から完全に解放された状態を表す。この場合、死の恐怖という精神的な苦しみからの解放という意味で用いられているが<sup>16)</sup>、ルクレチウスも同じ意味で使用している。他の二つの用例においては、**divumque voluptas** という形で示され、一方はウエヌスを、他方はカリオペーを指している。カリオペーは、また **requies**<sup>17)</sup> ‘安らぎ’を伴っており、静的なヘドネーを表していると言えるだろう。しかし、カリオペーは作品中一度しか用いられておらず、静的な喜びに限定されるのに対し、ウエヌスと **voluptas** だけは動的な喜びにも静的な喜びにも用いられる。また、**voluptas** が静的ヘドネー（アタラクシア）に関して必ず限定詞を必要とするのに対してウエヌスは単独で両者の一方の意味を表すことができるという点も重要である。このことから、最後にアタラクシアの象徴としてのウエヌスを論じておかねばならない。

既に、ウエヌスは動的ヘドネーの象徴として、また、**voluptas**の代わりとして用いられると述べたが、エピクロス哲学の象徴であるウエヌスは、さらに静的ヘドネーの象徴としても登場する。第一巻の冒頭で、ウエヌスは‘人間と神々の喜び’と呼びかけられるが、神々の喜びとはまさに静的なヘドネーであり、**voluptas** はここでウエヌスを指し示して、静的な喜び（アタラクシア）を意味している。ウエヌス到来の場面は、動的ヘドネーの最上の側面を表すと同時に、そこで用いられる表現はまた、今まで見てきたように静的ヘドネーの暗示ともなっているのである。ウエヌスが、自身のヴェールを脱ぎ捨て、エピクロス哲学の理想アタラクシアを具現する象徴としてその真の姿を現すのは<sup>18)</sup>、24行目以下からである。‘ウエヌスだけが死すべきものを静謐な平安 (*tranquillo pace*; アタラクシア) で喜ばすことができる’ (I. 31.) のであり、神々もこの静のヘドネーに従う。なぜなら、‘ウエヌスだけが事物の本性 (*rerum natura*) を支配する’ (I. 21.) のであるから。事実、32行目以下のマルスの登場によって、それは詩的に暗示されている。そこで、マルスはウエヌスの愛の傷によって永遠に打ち負かされ (*aeterno devictus vulnere amoris*, I. 34.)、ウエヌスに従うと描写されている。神々に対して用いられた愛 (*amor*) は、もちろん静的なヘドネーであり、ウエヌスの愛はアタラクシアを意味することになるはずである。なぜなら、詩人は‘永遠に’ (*aeterno*) という形容詞を用いているからである。マルスを破壊の神とし、ウエヌスを創造の神として、エン



ペドクレースの二大原理によって、この箇所を動的に解釈しようとする試みは誤謬を犯している<sup>19)</sup>。第二巻 569 行目以下からも明らかなように、宇宙における破壊と創造の終わりのない戦いにおいて、生命も死も、どちらか一方が永遠に打ち勝つことはできないからである。それゆえ、マルスに対するウエヌスの愛による永遠の勝利とは、静的ヘドネーの勝利以外の何物でもない。また、マルスに対して、甘美な言葉を注ぎ給え (I. 39) と、詩人がウエヌスに言う時、甘美な (suavis) という形容詞は性愛の意味で用いられたものではなく、静的ヘドネーの文脈で解される必要のあることは、いままでの考察からも明らかであろう。しかも、'栄光の女神よ、静かなる平安 (placidam pacem) を乞い給え。(I. 40.) などの表現に見るように、32 行目以下ウエヌスは絶えず pax の観念と結び付けられて用いられているのである。また、ウエヌスが実際の女神としてではなく、純然たる象徴の次元に位置し、神々の上に立つことも加えて重要である。第 1 巻序歌冒頭部 (第 1 ~ 49 行目) において、自然界の事物や動植物そして神々は、ウエヌスを前にする時、常に受動形で表され (concupitur 5, placatum 9, patefacta 10, reserata 11, percussae 13, [capta 15, fit 23, ornatum 27, sopita 30, devictus 34, semota, seiuncta 46, privata 47, capitur, tangitur 49), ウエヌスが主語となる文はすべて能動形の述語を有する (concelebras 4, pergis 16, efficis 20, gubernans 21, volvistis 27, da 28, effice 29), という明白な文体上のコントラストが認められるが<sup>20)</sup>, これは、神々の状態さえもウエヌスの息吹に触れられた宇宙の他の諸相の状態と同一であることを示している。(このことから、マルス自身もウエヌスと同列に置かれる力では決してないことが分かる。) こうした文体上の明白な対置は詩人の意図を離れては決して有り得ないものであり、ウエヌスを詩人は世界全体に働きかける超然としたヘドネーの力として捉えていたと見做されなければならないであろう。神々もまたウエヌスの名の下に象徴される voluptas の力によって、その存在が条件付けられているのであり、神々の本性はまさにウエヌスに由来する平安 (アタラクシア) の状態以外の何物でもないのである。ウエヌスは最初女神としての様相を帯びるが、それは序歌の伝統から来るものであり、その後ウエヌスが身にまとうすべての属性とイメージは、まったく異なった意味とともにウエヌスを新しい地平へと押し出し、文字通り自然界すべてを支配する象徴にま

で高めているのである。かくして、ルクレティウスの数ある多様な表現のなかにあつて、*ἡδονή* の持つすべての意味をになう言葉は、まさに象徴のウエヌスであると結論付けられるであろう。

## 注

- 1) Epicur. ep. III. 128., cf. Epicur. demonstrat. in fr. 66.
- 2) Epicur. fr. 2.; D.L., 136.
- 3) ウエヌスの広義の動的ヘドネーに関しては、E. Paratore, *Lucreti De rerum natura*, Roma, 1960, pp. 67~156 参照。
- 4) この意味での *laetus* に関しては、I. 23, 255; II. 631; III. 894; V. 1400. 参照。しかし、多くの場合二重の意味で使われていると解すべきであろう。
- 5) *ferax* は作品中一度だけしか用いられておらず (II. 1098. *terras feraces*) *fecundus* においても 4 回を数えるのみである。それに対して、*laetus* は合計 21 回使用され、'豊かさ' といった意味に限定しても 14 度使用されていることから、その差は歴然としている。
- 6) cf. Cic., *De fin.* II. 10, 33; p. 274, Usen.
- 7) 例えば、I. 256~261; II. 317~320 などの描写にそれは良く表れている。(唯一の例外は、人間の宗教の犠牲となる場合だけである。)
- 8) *laetitiae*: III. 116, 142, 150. 心の中に引き起こされる動的な喜びとして用いられる。  
*gaudia*: IV. 1106, 1196, 1206; V. 854, 1061. 性愛の喜びとして用いられる。  
*deliciae*: II. 22; V. 1450. 一般的な慎ましい楽しみとして用いられる。
- 9) 副詞形 *blande* においても、皮膚感覚の延長上にある '心地好き' を表すように思われる。(II. 320; V. 1067, 1369.)
- 10) *iucundus*: II. 3, 19, 399; V. 898; VI. 977.  
*iucunde*: II. 31, 403; V. 1394. 形容詞、副詞ともに主に感覚上の喜びを表す。また、動詞に関して言えば、*fruor* に見るように、魂の静的な喜び (I. 45; II. 647.) にも、肉体の静的な喜び (II. 18.) にも、肉体の動的な喜び (IV. 1078.) に対しても用いられ、定まった区別は設けられていない。同様に、*iuvare* は性愛に対しても (II. 437.) また、静的な喜び (I. 31, 927; IV. 2.) にも用いられる。但し、*laetor* は一般的な肉体上の喜びにしか使われていない。(III. 107, 109.)
- 11) *suavis, dulcis* はともに意味的にも近く、感覚的には '甘い' を意味する。IV. 658, 659 に見る *suavis* は *dulcis* と同じく、味覚上の甘さを表している。詩に対して用いられる用例は次の通りである。  
*suavis*: I. 413, 924, 945; IV. 20, 180, 909. / *dulcis*: I. 938, 947; II. 730; III. 419. IV. 13, 22.

自身の詩を *suavis* と言い、詩作の労を *dulcis* と表し、夜を徹しての詩の彫琢を *serenus* と歌う詩人の表現には、エピクロスの静的な喜びが一貫して流れて

- いるとともに、エピクロス哲学の見事な詩的表現が見いだされる。  
さらに、dulcisはエピクロスの教えを形容するのに用いられる。  
V. 21; VI. 4. (dulcia... solacia vitae; solacia dulcia vitae)
- 12) cf. Epicur. sent. 1. この箇所とエピクロスのテキストとを比較考察した論文として、B. Farington, "The Meanings of *Voluptas* in Lucretius," *Herma-thena*, 1952, pp. 26~31. 参照。
- 13) アタラクシアのメタファーとしての天候は、晴朗なる大気、澄み切った空、穏やかな海といったものであるが、反対に、喜びのない(苦に満ちた)状態のメタファーとして逆の天候状態が示される。(I. 64~65, 68~69; II. 1~2; V. 85~7, 118, 1226~1230; VI. 74.) この天候のメタファーからもアタラクシアに対立する概念が、宗教と死の恐怖であることが暗示される。精神状態のメタファーとしての海に関しては、Cic. Tusc. Disp. 5. 5. 6. 16 および、Plutarcus, contra Epic. beat. 5. p. 1090<sup>b</sup> 参照。また澄み切った空に関しては、Seneca, epist. 66. 45. 参照。
- 14) Ep. sent. 3. §139., sent. 9. §142., sent. 18. §144., sent. 19. §145., sent. 20. §145., cf. Plutarchus, contra Epic. beat. 3. p. 1088<sup>c</sup> 等を参照。
- 15) 25回もの用例が示すように、ルクレティウスは liquidus という形容詞をとりわけ好んで多用する。'純粋な喜び'の意味での liquidus はケクロの中にも見いだされる。(Cic. Fin. 1. 58, liquidae voluptatis et liberae) また、エピクロス哲学では魂(心)の清め、浄化が最も重要なこととされるが、形容詞 liquidus はこれを暗示するものであり、**purgatus** (V. 43, purgatumst pectus), や **purgare** (VI. 24, purgavit pectora) との関連もまた見逃されない。
- 16) C. Bailey, *Epicurus. The Extant Remains*, Oxford, 1926, p. 356.
- 17) 他の箇所において、精神的な安らぎの意味で用いられる用例はなく、通常元素の運動、流出に'休止'がないことに用いられる。(I. 992; IV. 227; VI. 993) その他、苦痛の'休止'がある。(VI. 1178.) (また、quietus の名詞形 quies は、隠喩として用いられない。) <カリオペー=静的な喜び>に対する議論に関しては、E. Bignone, *Storia della letteratura latina*, Firenze, 1942, vol. 2, p. 443., Traglia, *Sulla formazione spirituale di Lucrezio*, Roma, 1948, pp. 195~6., P. Giuffrida, *L'epicureismo nella letteratura latina nel 1 sec. av. Cristo*, Torino, 1950, pp. 83~84., E. Paratore, *ibid.* pp. 70~77. に詳しい。
- 18) Venus-Voluptas-Pax-Atarassia に関して、とりわけ重要な論文として、E. Bignone, *ibid.* pp. 427~443., "Nuove ricerche sul proemio del poema di Lucrezio," *Rivista di filologia e d'istruzione classica*, 1919, pp. 423~433, E. Paratore, *ibid.*, J. P. Elder, "Lucretius I. 1~49," *TAPA*, 1954, pp. 88~120. を参照。
- 19) エンペドクレス的解釈に関するものとして、W. A. Sellar, *The Poets of the Republic*, 1889, pp. 299~302., H. A. J. Munro, *Commentary Book I*, 1893, pp. 299~302., F. Giancotti, *Il preludio di Lucrezio e altri scritti*

*lucreziani ed epicurei*, 1959., D.Clay, *Lucretius and Epicurus*, 1983,  
pp. 82~110. を参照。

20) この指摘は, E.Paratore による。cf. *ibid.* pp.108~109.

(本論文は, 文部省科学研究費補助金<奨励研究(特別研究員)>による研究成果の一部である。)